

Trial & Error

No.263

November-December 2007

特集

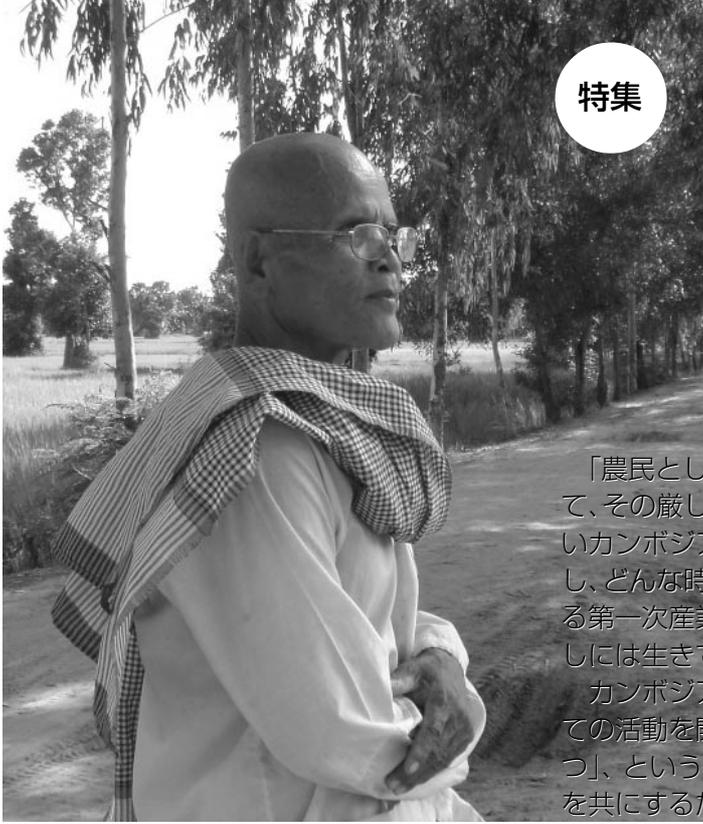
カンボジア： 農民として生きるために



JVC

Japan International Volunteer Center

カンボジア： 農民として 生きるために



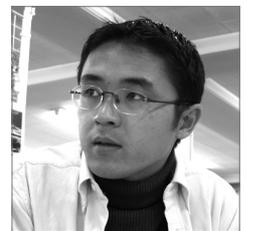
「農民として生きる」——、経済市場が強い力を持つ現在社会において、その厳しさは日本も他の国も変わらない。苦難の歴史の記憶も新しいカンボジアの人々にとっては、それはなおさらかもしれない。しかし、どんな時代でも人間は食べなければならず、それは農業を始めとする第一次産業によって支えられている。まぎれもなく、私たちは農業なしには生きてはいけないのだ。

カンボジアの農民と共に活動してきたJVCは、今年から場所を変えての活動を開始した。場所は違えど、「その地に暮らす人々の視点に立つ」、という立脚点は変わらない。現代の農村に生きる人々と目指す先を共にするための活動を報告する。(編集部)

■今回のインタビューに答えてくれたティーさん。

ある農民家族の肖像

カンボジア事務所
農業・農村開発担当
山崎勝



■プロフィール
大学在学中に農業に関心をもち、アジア学院にて有機農業などを学ぶ。その後、他NGOで農業ディレクターとしてカンボジアに派遣され、農村開発プロジェクトに従事。その後、〇三年より現職。

■日々の暮らしを営む夫婦

世界遺産アンコールワットから車で舗装道路を一時間、さらに土埃の舞う未舗装の道を三十分程走ったところにあるタ・ヤエク村で、モツ・ティーさん(男性、六十四才)、ソー・チェーンさん(女性、六十一才)夫妻は農業を営んでいる。わずかな田んぼを耕し、家族が食べていくことで精一杯という生活であるが、これまで二人が歩んできた歴史を考えれば、「生きている」というだけでも感謝せずにはいられない。

■かつての豊かな暮らし

二人が生まれた四〇年代、カンボジアはフランス統治下にあった。五三年に独立を果たし、シハヌーク国王による王制社会主義の時代が始まった。カンボジアにとって比較的平穏な時代であった。ティーさんは十八歳で出家して僧侶になり、チェーンさんも農家の娘として、平穏な日々を送っていた。ある日、ティーさんの母親がお寺でチェーンさんを見かけて気に入ったことがきっかけで、二人は結婚することとなった。

二人とも「結婚して良かった」と口をそろえる。カンボジアでは僧侶が結婚することは許されていないため、ティーさんは還俗した。七〇年に結婚した二人は、新たな耕作地を求めて現在暮らしているタ・ヤエク村に移住した。ティーさんは農業を営むかたわら、学校の教師となった。当時は村には百世帯ほどが住み、二人は五ヘクタール(五百m×百m)ほどの田んぼを耕した。川や沼では大きな魚がたくさん獲れ、森へ行けば、ウサギ、狐、猿、鳥、様々な木の実、木材、薪、薬草など、何でも手に入れることができた。

二人には三人の娘と二人の息子がいるが、長女と三女、長男の三人はすでに結婚して家を出た。次男はプノンペンの大学で勉強中であるが、その学費を工面するために、次女はプノンペンの縫製工場働いている。親戚から三人の子どもを預かり、学校へ通わせながら農作業を手伝ってもらっている。

ティーさんは在家ながら仏門に入っているために、鶏や魚はもちろんだ畑の虫さえも殺すことができない。

「当時はどの家も大きく立派で、貧しい家庭はなかった。今のようには学校へ行けないという子どもはいなかった。唯一、今と比べて病院がなかったことだけが不便であった。ただ、昔に比べると今の方が病気になる人の割合が増えている。特にマラリア、デング熱、肺炎などにかかる人が、このところ際立って多い」(ティーさん)

病気が増えている理由については明らかではないが、村を歩いてみると、髪の毛が茶色く、お腹が膨れ上がっている子どもを目にする。典型的な栄養失調の症状である。「昔はこのような子どもはいなかった」



■田んぼの草むしりをするチェーンさん。「今年は雨が少なく、稲の生育が心配」だそうです。



■かつて井戸があった場所。今は埋められて田んぼになっているが、かつては多くの死体その中に捨てられた。

チェーンさんは田植えや稲刈りの家族は離れ離れになり、ティーンさんは森林の伐採や灌漑水路の建設など重労働を命じられた。

「波尔・ポト時代は誰もが不幸だった。ちょっとしたことで殴られ、殺された。僧侶や教員は知識人とされ虐殺の対象とされた。そのため、波尔・ポト派の兵士は常に私の行動を注視していた」(ティーンさん)

ティーンさんによれば、この時代、百名ほどがこの村で殺されたという。一世帯に一人の割合である。近隣の村に住んでいたティーンさんの兄弟三人も、学歴が高いことを理由に、収容所として利用されていた寺院に投獄され、処刑された。近くのお寺の本堂には、今でも壁に血の跡が残っている。

「このころは、大きな魚はまったく見なくなりました。また、一日中歩き通しても、森までたどり着けない。ようやく森にたどり着いても、木の実や果物は少ないし、動物にいたってはまったくない。また、内戦前はすべての家庭に自転車があった。今は、バイクや車を持つようになった人がいるが、その一方で、自転車すら持っていない家庭も出てきた」

「波尔・ポト時代は誰もが不幸だった。ちょっとしたことで殴られ、殺された。僧侶や教員は知識人とされ虐殺の対象とされた。そのため、波尔・ポト派の兵士は常に私の行動を注視していた」(ティーンさん)

「波尔・ポト派の兵士は夜になると家を訪ね、会議だと言って人を連れ出した。そうした人たちの多くは殺され、村の外れの井戸の中に棄てられていた」(ティーンさん)

その一方で生活は少しずつ良くなった。波尔・ポト政権が崩壊した七九年、新政府から一人当たり三十六アール(三六六×百m)の土地が与えられた。その土地では自由に耕作でき、収穫物を取り上げられることもなかった。

「お盆と正月に子どもたちが孫を連れて帰ってくるのが一番嬉しい。村で農業をして暮らしていくのは大変だけれども、できれば、子どもと孫たちと一緒に暮らしたい」(チェーンさん)

「と」ティーンさんは言う。農作業をさせられた。

「とにかく、働かせられた。朝四時から夜七時まで田植え、食事は一日に二回、おかゆにバナナの幹を刻んだものを平たいお皿に一杯だけ。とにかく、お腹が空いて仕方なかった。家の庭にはバナナや果物がなっていたが、勝手に収穫して食べることは許されていなかった。夜中にサツマイモを盗み食った人が、翌日に処刑された」(チェーンさん)

七九年一月にベトナム軍の侵襲により首都フロンペンが開放され、歴史上の波尔・ポト時代は終焉を迎えた。しかしこの地域は、北部が森林山岳地帯であることもあり、最後まで波尔・ポト派の残党兵と政府軍の戦闘が続いた。戦闘に巻き込まれ、命を落とす人も少なくなかった。

平和が訪れた一方で、農村の人口が増え、米を作ることができるようになった。田んぼは年々小さくなっている。森などの自然資源は失われ、頻りに干ばつや洪水に見舞われるようになった。村で農業をしながら暮らしていくことは、以前よりも難しくなってきた。

■ 苦難の歴史

■ 戦争の終焉と 平穏な暮らしの中で

※注① ポル・ポト派とも呼ばれ、75年4月から79年1月まで直接的な共産主義を目指してカンボジアを支配し、全国民に農村で強制集団労働・生活を強い、特に知識人を虐殺。飢餓・疾病と合わせ、同政権下で170万人が命を落とすとされる。

『生態系に配慮した農業による 生計改善プロジェクト』とはなにか

カンボジア事務所現地代表

米倉 雪子

同 農業・農村開発担当

山崎 勝



■米倉プロフィール
UNHCR(国連難民高等弁務官事務所) 駐日事務所勤務、イギリス留学、他NGO勤務などを経て〇一年より現職。留学中にカンボジアにおいて市民団体・民主化に関する調査を実施、そこでの経験や出会った人々に影響を受けた。

生態系に配慮した農業による 生計改善プロジェクト概要

■プロジェクト名称

生態系に配慮した農業による生計改善プロジェクト (Community Livelihood Improvement through Ecological Agriculture and Natural Resource Management (CLEAN))

■活動期間

〇七年四月～一〇年三月

■活動対象地域

カンボジア王国シエムリアップ県チークラエン郡およびソントニム郡(〇七年は八集合同三十五村で活動。その後、六十村に拡大予定)

■長期目標

地域の生態系に配慮した農業や自然資源の活用、相互扶助活動などによって、カンボジアの家族経営農家の生活が安定する。

■プロジェクト目標

地域の生態系に配慮した農業や自然資源の活用、相互扶助活動などによって、対象地域の家族経営農家の生計が向上する。

■期待される成果

- ①対象地域の農民によって生態系に配慮した農業が実践される。
- ②対象地域の農民の相互扶助が強化される。
- ③対象地域の農民によって地域の自然資源や伝統的技術などを生かした取組みが強化される。

■今も厳しい農民の暮らし

九九年に最後のクメール・ルージュ幹部が投降し、三十年に渡るカンボジアの内戦は終わりました。地雷・不発弾の死傷者の数も年四百五十人(〇六年、二千五百五人)九八年^{※注①}へと減り、九〇～〇四年の一人当りのGDP年成長率は約5%と復興が進んでいます。

一方、国民の約七割は今も農業に従事し、その多くは自給を中心とした小規模な家族経営農家です。けれども、収穫量が少ないために家族の分の食料も足りず、生活は不安定で、都市と農村の貧富の格差も拡大しています。今も国民の三人に一人が栄養失調で貧困線以下の生活をしており、その九割は農村に住んでいます。五歳になる前に七人に一人の子どもが命を落としていきます。現金収入を求めて、都市部や海外へ出稼ぎに行く農民も増えていますが、彼らの多くは基礎教育を受けておらず、低賃金

で過酷な労働を強いられています。

そのために健康を害し、さらに困窮する例も多いです。出稼ぎに行き、買春・売春などによって、HIVに感染する問題も起きています。治療費や食料不足のため借金をし、農地を失い、都市のスラムに流入する農民も増えていますが、そのスラムが立ち退きに遭い、生活手段を失う人もいます。

こうした問題を解決する一助として、JVCは今回、農家、特に小規模農家の生計改善をめざす活動を始めることにしました。

■新規活動地域の選定

九四年からカンダール県で実施してきた持続的な農業と農村開発(SARD)プロジェクトは終了段階に入っており、新しい活動は他の地域で実施することになりました。当初は現活動地に近い地域が候補にあがりましたが、すでに同様の活動を行なうNGOが入っていることや、首都に近いことから

出稼ぎに行く人も多く、持続的農業や農村開発への住民の必要性は下がっていることがわかりました。

一方、都市部から遠く、行政サービスやNGO、援助機関による支援が届きにくい地域にはその必要性があると想定しました。

そして、国内の十県で地域の状況や他NGOなどの活動状況についての調査を実施しました。県農村開発局を訪れて全体の状況を把握し、特に生活状況が困難でかつ農業および農村開発の分野で活動しているNGOがない地域を選びました。その後実際に訪問して、コミュニティ評議会のメンバーから住民の生活状況についての聞き取り調査を行いました。稲作地域だけではなく、森林伐採などの問題が深刻化している畑作を中心とする半乾燥地への将来の活動の展開も考慮しました。

調査の結果、シエムリアップ県東部のチークラエン郡およびソントニム郡が選ばれました。同地域

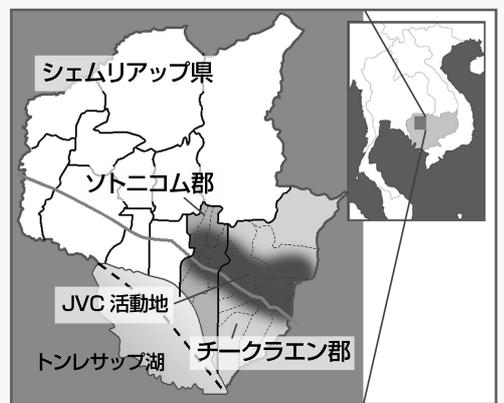
※注① CMVIS(Cambodia Mine/UXO Victim Information System) 2005年度版報告およびCMAA報告2007年7月より。ただし、05年度に除去された地雷/不発弾の数は約30万個、地雷/不発弾が今も埋まっているとされる危険地帯(=汚染地域)も約2,728平方kmとされており(ICBLランドマイン・モニター報告書2004年度版及び2006年度版)、それらの早急な除去が今も必要であることに変わりはない。



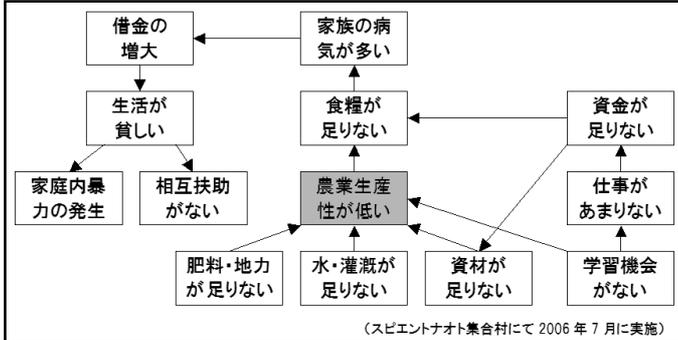
■栄養と安全な食について学ぶ調理コンテストでクイズに答える農家。



■米の収量を増やす手法である幼苗一本植え(SRI)を学ぶために農家が相互訪問する。



■JVCの主な活動
 【初年度】・農村地域での生活の基盤である、稲作、養鶏、家庭菜園、堆肥作り、植林などの研修を実施し、各世帯の食料確保と生計改善を目指す。
 【二年目】・貯蓄活動、食品加工、共同出荷、環境教育などに関する研修を行ない、農民のグループ活動を支援する。
 【三年目】・国内外の農民グループとの交流の機会を提供し、農民同士が学びあえるように支援する。



(スピエントナオト集合村にて2006年7月に実施)

■図① 村における問題の相関図

は、九七年にクメール・ルージュが投降するまで治安が安定せず、外国の援助がこれまでほとんど実施されていませんでした。この地域の南部は、東南アジア最大の淡水湖であるトンレサブ湖に面し、漁業と稲作を中心に人々は生計を立てています。また、中部は首都プノンペンとシムリアップを結ぶ国道六号線を挟んで稲作水田地帯が広がっています。さらに、北部は森林地帯で、多くの農民は木材の伐採、加工、炭焼きなど森林資源を利用しながら生計を立てています。特にJVCが活動対象としている中部では、稲作の単位面積あたりの収穫量がカンボジア全体の平均に比べて低いうえに、薪や木材、木の実や野草、野生動物などの食料を採取してきた森が、人口増加に伴う開墾や伐採によって急速に減少しています。そして、今後とも人口が増加していくことが予想されることから、現在利用している田畑でどのようにして食料を確保するのか、そして、残された森をいかにして持続的に利用するかが大きな課題と言えます。

■暮らしの課題に取り組む

調査によって、この地域の約四割の世帯で、家族の誰かが、女性はプノンペンの縫製工場、男性は観光地シムリアップの建設現場や

隣国タイに出稼ぎに行っていることがわかりました。約六割の世帯では支出が収入を上回り、借金で生活している農民も多いです。さらに、富裕層に比べて経済的な余裕のない貧困層の方が医療費への支出が多いことがわかりました。栄養のある食事や衛生的な水を確保できていないことが原因であると考えられます。医療費の負担のために借金をしたり土地を売却したりするケースも見られます。こうした状況について村の人々に話し合ってもらったところ、図①のような問題の相関関係が示されました。これを受けてJVCは、この図の「農業生産性が低い(網掛け部分)」ということを中心として捉え、その改善によって村での暮らしをより良くする活動を立案しました。具体的には、化学肥料や農業を使わなくてもいいような「生態系に配慮した農業」の技術を紹介し、さらにグループ活動を通して食品加工などの収入向上活動を支援することによって、農業生産性を改善し、農民が安全な食料を持続的にかつ十分に得ることができるような計画を立てました。まずは十分な食料を確保し、さらに収入向上へつなげることで、医療や教育に関する状況の改善も期待できます。

■農民と同じ未来を見る

内戦は終わりました。しかし、この地域の農民が安心して暮らしていくためには、まだまだ課題は多く残されています。昨年、チークラエン郡に入るにあたって農家の将来の展望について農民や行政も交えて話し合った際に、次のような話がありました。「村の人間は、主に三つのやり方で生計を立てている。①村で農業などの仕事をし、時々出稼ぎに行く、②家族全員で出稼ぎに行く、③出稼ぎをせず、村で自営農家として生計を立てる。タイに出稼ぎに行っても、警察に逮捕されて送還されたり、出稼ぎも低賃金かつ重労働で病気になったりする。家族で出稼ぎに行く子どもは学校に行けない。村で暮らせば、家族と暮らせて助け合えるし、村も発展する」

参加した農民全員が希望した未来像は、③でした。そして、「そのためは何をすればいいのか。自分たち自身で変えていくこと、新しい農業技術の改善の仕方を学び、実践する必要がある」という、前向きな意見が多く出されました。多くの農民が、自分たちの生業である農業を改善することから取り組みを始めたいと考えています。JVCはこうした農民と共に、この活動を続けていきます。

※注②、注③ UNDP 人間開発報告 2006 年度版より。
 ※注④ 小学校卒業率が 48%、中学校進学率 26%、成人識字率は 74%。07 年 6 月 CDCF 資料および UNDP 人間開発報告 2006 年度版より。
 ※注⑤ 10 人前後で構成される地方行政機関で、住民によって選挙で選ばれる。

人から人への絆を途切れさせないように

代表理事 谷山 博史



■ 訪朝実現までの経緯

八月十五日から二十三日まで朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）を訪問した。今回は「南北 코리아 と日本のもちだち展」実行委員会の団長としての訪問であった。この「もちだち展」は、JVC が設立から参加している KOREA こともキャンペーンが事務局となつて過去七年間続けている、日本、北朝鮮、韓国の子どもの絵を集めて三カ国で展示会を催す企画である。

今年の訪朝は、訪問前から不測の事態に直面していた。まず、六月の日本での絵画展直前、毎年後援してくれていた外務省が後援できないと通知してきた。また、訪朝直前には北朝鮮側が絵画展の開催延期を連絡してきた。昨年来高まっていた日朝間の緊張が、私たちの

民間の交流事業にまで陰を投げかけたのである。さらに八月に入つて、北朝鮮は四十年來と言われる豪雨と水害に見舞われる。

このような状況で訪朝が可能なのか、訪朝の意味があるのか、直前まで模索が続いた。しかし、訪朝は実現した。「子どもたちの交流は続けよう」「関係が悪化した日朝間での民間のパイプを途切れさせてはならない」という日朝双方の関係者の思いが結実したのである。

■ 子どもたちとの交流

日本から訪問した子ども六人と平壤市の小学校の生徒との交流会は、和やかな雰囲気の中で行なわれた。ルンラ小学校では、日本からの子どもとルンラの子どもたち、先生方が皆で歌を歌って盛り上がった。



■ チャンギョン小学校で子どもとついに粘土細工をする。



■ 水が引いてみたら舗装が崩れていた歩道。（平壤市内）

チャンギョン小学校では、粘土で絵文字を作る共同作業を行なった。初めははにかんでいた子どもたちも打ち解けて仲良しになり、出発の時間が来ても離れようとしなかった。ルンラでもチャンギョンでも、先生方のもてなしには日朝関係の悪化の影響は見受けられなかった。これまでの交流の積み重ねがあつたこととであろうと、交流の意味を改めて実感した。

■ 洪水支援について

直前の水害の発生で、訪朝団には洪水の被害と支援の方法を調査するという目的が加わった。事前の調整が難しかったために被害の激しい現場に行くことはできなかったが、今回の洪水の凄まじさの一端を垣間見ることができた。年間平均降水量が一千ミリの土地が、五日間で六百ミリから八百五十ミリもの集中豪雨に見舞われたのである。平壤では市内を流れる川（普通江）があふれ出し、付近一帯が冠水した。ポトンガンホテル近くの川沿いの遊歩道では並木が倒れ、塀には七十〜八十センチの高さまで水が来た跡が残っていた。郊外では、いたるところで軍や学生、地元住民が冠水した道路の修復作業を行なっているのを目にした。

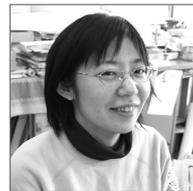
不足である。病院や診療所などの医療施設は、被災地全体でその三〇〜四〇%が全壊か一部破損の被害を受け、もとも不足していた医薬品の供給はより深刻な事態に直面している。KOREA こともキャンペーンでは、十年にわたる北朝鮮への人道支援と交流の実績を活かし、被災地に直接医薬品を届けることができるよう国際赤十字連盟や朝鮮赤十字、そして受け入れ機関である朝鮮対外文化連絡協会と調整を始めることになった。

■ NGO の役割とは

今回平壤を初めて訪れて、外国の観光客が多いのに驚いた。平壤への窓口である中国の瀋陽空港にはヨーロッパからの団体観光客が列をなしていた。日本から見ている北朝鮮と世界から見ると北朝鮮には明らかな違いがある。朝鮮半島をめぐる国際情勢は急展開の様相を呈している。六者協議の進展にともない、東アジアのデタント（緊張緩和）は時間の問題だとの見方が広がっている。そんな中、韓国はじめアメリカやEU、各国のNGO が水害支援に乗り出した。日本政府は人道支援を行なわない方針だが、日朝関係が厳しい今だからこそ NGO は人から人への支援の実績を積み上げていかなければならないと考えている。

2007年の『ともだち展』を振り返って

コリア事業担当 寺西 澄子



この1年の北朝鮮に関する動き

- 06年9月 安倍内閣が発足
- 10月 北朝鮮、核実験を実施
→日本が経済制裁を強化（輸入・入港・人的交流の全面禁止）
国連安全保障理事会、北朝鮮制裁案を全会一致で可決
JVC、核実験に対する見解発表
- 11月 北京で米朝会議
朝鮮総連東京都本部など強制捜査（薬事法違反）
- 12月 『ともだち展国内巡回展』（松山、福岡、埼玉）
第5回六者協議開催、一時休会
- 07年1月 『ともだち展国内巡回展』（茅ヶ崎）
2月 第5回六者協議再開
『ともだち展』@新潟国際映画祭、トークショー
- 4月 米国、マカオのパンコ・デルタ・アジア（BDA）の北朝鮮関連口座凍結を解除
- 5月 **ともだち展実行委 平壤訪問（絵画の依頼）**
- 6月 整理回収機構（RCC）が東京地裁に朝鮮総連中央本部の土地・建物に対する強制競売の申し立て
ヒル米国務次官補が訪朝
東京で『南北コリアと日本のともだち展』開催
- 8月 北朝鮮にて大雨洪水の被害（40年ぶりの規模）
『ともだち展』平壤を訪問（子ども交流）
- 9月 ソウルで『東北アジア子ども平和絵画展』開催
第6回六者協議
- 10月 第2回南北首脳会談

この一年は、振り返ってみると「拉致内閣」などと言われた安倍政権との一年でもあり、北朝鮮による核実験といった出来事もあり、ますます日朝双方の態度が頑然になった年だった。結局、拉致も核も大きな進展のないままに安倍首相は退任したが、昨年来の政治状況は、半年、一年を経て、『ともだち展』にもボディブローのような影響を与えている。

今年五月、東京で展示する絵画を依頼するため平壤を訪れた。一つの小学校では「ともだち展」参加が楽しみ」と絵画提供を快諾し、

「日本との絵画展に」気が進まなくなつた」と言つ。映像の力は大きい。これまでの交流で親近感を持っていったとしても、メディアに

てもらった。しかし、もう一つの小学校は「今年は日本に送る絵を描くのは難しいかもしれない」とためらっていた。安倍政権の態度や経済制裁強化のニュースを見聞きしていたからだろう。

東京展に絵は届いたが、夏の平壤展は開催できなかった。朝鮮総連関連施設への強制捜査の様子が平壤でも放映され、それを見た保護者はもちろん子どもたちも、

水害復旧支援に取り組みます

谷山報告にもありますとおり、今年8月7～14日にかけて、北朝鮮で発生した水害は死者・行方不明者600人以上と言われ、例年のない規模であったと報告されています。JVCは今回『北朝鮮水害復旧支援キャンペーン』に参加し、医薬品・医療備品の支援を行います。この復旧支援キャンペーンには、KOREA こどもキャンペーン（アークス、地球の木、JVC）のほか、これまで北朝鮮への人道支援と交流に取り組み、現地の人びととの間に信頼関係を培ってきた日本と在日コリアンの団体が共に立ち上げました。

●支援概要

対象：洪水被災地（江原道、平安南道など）の医療施設
品目：医薬品などを、赤十字の緊急支援物資リストから選定
支援方法：支援物資を現地調達および日本から持ち込み、医療施設に直接配布
実施時期：2007年10月下旬



■ソウルでの『東北アジア子ども平和絵画展』ワークショップに集まった子どもたち。

影響された世論に逆らいきれないのは、北朝鮮批判の渦中にある日本にいるからこそよくわかる。だが、子どもの交流でさえ政治やメ

ディアの影響を受けざるを得なかったのは無念だった。八月の平壤訪問時、現地の先生は「完全にやめるのではない、今の時期だけは避けたい」と言ってくれた。絵画展はできなくても、朝鮮学校の子どもたちとの交流は歓迎してくれ、彼女たちは東京展の様子を皆の前で説明し伝える役目を担った。

また、九月のソウルでの『東北アジア子ども平和絵画展』では、国籍や生まれ、言語など異なる背景を持つ子どもたちが、親しくなる過程を目的にした。ソウルの行事主催者であり、毎年協力しあつてきた韓国NGO・オリニオツケドムも「これまでの積み重ねは、必ず未来に繋いでいかなくはならない」と言ってくれた。実際に絵や人に接しているからこそ、政治やメディアに振り回されずに自分で考え、時を待ちながら行動を起こす人が生まれる。『ともだち展』の可能性は、そこにこそあると信じていた。

「ともだち展」の可能性がある、そこにこそあると信じていた。

*上記支援に関するお問い合わせは、JVC(TEL:03-3834-2388)にお願いいたします。

タイ スタディー ツアー報告

タイ事業担当
下田 寛典



8月4日から11日まで、スタディーツアーで東北タイを訪問した。JVCタイは、東北タイのコンケン県で「地場の市場づくりによる地域自立支援」プロジェクトを01年から05年まで実施していた。今回のツアーでは、「NGOのプロジェクトのその後」の市場の活動を知ってほしいと考え、コンケン県ポン市の朝市を訪問し、その市場を運営する市場委員会のメンバーと交流することにした。また、村の暮らしを体感してもらうために、この市場に参加しているノンウェンナンバオ村へホームステイをさせてもらった。農業体験もまじえて、東北タイの農村・農民の暮らしを五感で感じ取ってほしいと考えた。

市場委員会との交流では、プロジェクト実施中には5地域が参加していたが、現在は新たに1地域が加わり、地域の住民の手によって着実に運営されていることを伝えることができた。また、農業体験を実施したムクダハン県のカオデー農園では、参加者に豚を一頭「絞めて」もらった。店頭で売られているパック詰めの肉からは、こうした生々しい過程は見えてこない。衝撃的な体験だったかもしれないが、「命をいただく」ことのありがたさを改めて感じる機会になった。このツアーが参加者にとって、東北タイの暮らしから日本に住む自分たちの暮らしを見つめなおす契機となってくれたようでとても嬉しく思った。

参加者の声・1



飯島省蔵さん
60代・元会社員

退職後タイで日本語教師を1年半経験した。今は事情で教師職を中断し何もしていない。その現状を打破するための「次の場」を発見すべく、このツアーに参加した。タイ東北のコンケンやムクダハンを訪れ、JVCが今までこの地に根をおろし築き上げてきた農村運営の工夫や有機農業の農園生活の一端を垣間見させてもらうことができた。朝市やカオデー農園などにJVC諸先達の献身的かつ地道な活動の結実を目の当たりにできて感動した。この事実をもっと多くの若い人たちにてもらいたいと思った。

おりから残留農薬野菜や食品製造の不正が問題視されているが、土地が植物を育てそれによって動物たちも育ち、人間はそのおかげで今まで生きてこれたと実感できた。有害なものを含まない栄養豊かな土地こそ宝と気づけるようになった。ツアー参加者それぞれ思いはあろうと思う。私の「次の場」は農業関係の何かに見当をつけたいものである。

参加者の声・2



矢ヶ崎さん
20代・会社員

日本は食料自給率が低く60%は輸入頼みだが、途上国では輸出向けに近代農業を導入した事で多くの問題が起きている。そういう話を聞いて農業への関心が芽生え、ツアーに参加。タイで有機農業に転換し、地場の市場作りに取り組んでいる地域を訪問した。農業や化学肥料の導入で借金に苦しんでいる農家が事態を打開するための取り組みを始め、今では地域の消費者とのつながりも生まれている。農家の方自身からお話をうかがい、実際の問題や熱い気持ちを実感できた。

さらに、農村での滞在や農作業体験で、人と人、人と自然とのつながりを大切にしたい、シンプルで心豊かな農村の文化を五感で感じた。とても自然体になってワクワクし、命をいただくことの有難みも感じた。農村暮らしのほんの一端を垣間見ただけだが、食べ物の向こう側にこうした農家の方たちの暮らしや動植物の命がある事に思いを馳せるようにしたいし、農業への関心をもっと深めたいと思った。

■ JVCタイ事業では、JVCがこれまで関わってきたプロジェクトのその後の活動や、農村の暮らしを体験しながら、自分たちの暮らしのあり方を再考する機会としてスタディーツアーを年2回実施しています。次回は、2008年2月末頃を予定しています。ぜひご参加ください！

その地に
生きる人々

3

ラオス

ティアンカンさん



■セバンファイ川。魚を獲ったり、農業で利用したりと、村人の暮らしを支えている。



■畑でキュウリの世話をする。

『川から離れた生活は 考えられない』

ラオス カムアン県での活動

ラオスの村の人々の生活は、「自然の恵み」で成り立っています。川や森の豊かな産物が、稲収穫前の米不足を埋め合わせており、自然と農業の補完関係にあります。しかし近年、ダム建設や産業植林などの経済開発が進められ、自然は急速に失われており、村の生活環境が変化しています。JVCでは、村人自身が



森林を守るための「土地森林委員」を通じて村の権利確保を行ない、同時に生活向上のために、稲作技術改善などの持続的農業の推進を行なっています。

生まれてから四十年以上ずっとこの村で暮らすティアンカンさんは、「近くに流れるセバンファイ川が、この村で好きな所だ」と話します。メコン河の支流であり、生活に欠かせないこの川は、しかし数年に一度は決まって洪水となり、厳しい面も持ち合わせる。上流で進むダム建設の影響も懸念されている。それでも、この川から離れた暮らしは考えられないと言いつつ、一番ひどかった洪水は、彼が十歳だった七二年。最近では、〇五年も同じ位にひどかった。膝上まで水が来て、田も水に覆われて稲を駄目にしてしまう。家畜を売って生計をやり繰りした。

今年の雨季もまだまだ気が抜けない。十月上旬までは大雨が続く場合もあり、今は順調な田のことを気にかける。今年も、JVC開催の研修に参加して、幼苗一本植

え(SRI)の技術を実践している。新たな技術を活かした収穫が待ち遠しいと言いつつ。

田の仕事以外にも、川で魚を獲り、十頭近くの水牛を世話し、畑に行っては野菜、サトウキビ、バナナを育てている。時には、耕運機で四キロ離れた森へ行き、産物を持ち帰ってくる。森からラタン(籐)も採取して菜園で育て始めた。しかし、植栽方法が良くなかったのか、半数の株が枯死してしまった。その後、JVC支援のラタン育成研修に参加し、増やす手法を学んだと言いつつ。自分ひとりではわからなかったことを知ることができると、JVCが開く研修にも積極的に参加する。

洪水の被害にも耐えられるよう、多様な仕事にいそしみ、学校へ通う子どもたちを含む八人家族の暮らしを支えている。

ラマダンのお菓子「カターフ」

パレスチナ現地代表 小林 和香子

9月半ば、今年もラマダン(断食月)がスタートしました。イスラム教徒の人は日の出から日没まで飲まず食わず、仕事をしたり、学校に行ったり日常生活を送ります。日没の合図がモスクから流れると同時に、イフタルと呼ばれる食事をします。イフタルでは、スープにメインの料理(肉や鶏肉と味のついたご飯が一般的)と、そして特別なお菓子を食べます。

そのお菓子の代表選手が「カターフ」と呼ばれるもので、パンケーキのような皮の中にチーズや砕いたク

ルミをいれて^{ぎょうろ}餃子のようにまわりを閉じて甘いシロップをかけたものです。ラマダン中は、繁華街の飲食店は軒並み閉店して、カターフを売るスタンドに早変わりします。できあがったものも売っていますが、皮と中身のチーズやクルミを別々に買って、家で作って熱いうちに食べるのが一般的。ふわふわの感触が子供たちにも大人気です。

でも、実はこのパンケーキのような皮、食感が日本によくある和菓子に似ています。とっていたら、日本からのお客様があんこを持ってきて



イラスト/かじの 倫子

下さいました。それじゃあ作ってみるしかない。あんこを皮でつつんでフライパンで少し温めたら、ふわふわあつあつのどら焼きができちゃいました。集まったエルサレム在住の日本人にも、「なつかしい!」と大好評。パレスチナと日本は古くからお菓子でつながっていたのかも、なんて思いを馳せると、さらに味わい深くなります。

『制裁論を越えて 朝鮮半島と日本の<平和>を紡ぐ』

みるよむきく



中野憲志編 藤岡美恵子、LEE Heeja 他著 新評論刊 2600円+税

一応ジャーナリストと名乗っている関係上、とても恥ずかしい思いがする 때가 ある。その最たるものがいわゆる北朝鮮物である。荒唐無稽、憶測、悪意といった、およそジャーナリズムとは無縁であるはずのことも、電波や紙を通して運ばれ、人びとの頭の中で「事実」と化していくさまを見ると、恥ずかしさの余り身をよじりたくなるほどだ。

しかし考えてみれば、荒唐無稽、憶測、悪意が「事実」となるには、そうなるだけの受け皿というか受容体と、それを「事実化」していく装置があるはずだ。本書は、受け皿としての日本の「市民社会」が持つある種の危うさをえぐりだし、それが受容体から動態に変容して「世論」となり、制裁政治へと政治を誘導するにいたるメカニズムを解明する。そのキーワードは「植民地主義」の継続である。「市民」もまた内なる植民地主義を引きずっている。そこをメディアがくすぐる。国家がそれを利用し、軍事大国化と排外主義へと民衆を煽動する。こつした現実を踏まえながら、著者たちは国家に絡みとられない普通の人々の目線で、制裁の論理を乗り越えるもうひとつの筋道を(オルタナティブ)を懸命に探す。本書の著者たち、藤岡美恵子、

「MIEGEE」、金朋央、宋勝哉、寺西澄子、越田清和、中野憲志らに共通しているのは、実践者であり当事者であるということである。では本書が提起するオルタナティブとはどういうものか。第四章で越田は「平和的生存権に基づく国際協力」を提言する。これを支える概念は「民衆による国際協力」である。続いて中野が最終章で「安保を無みする」たたかいを訴える。それはそれでなるほどと思う。同時に、グローバル化とともに進む日本社会内部の亀裂と他者の排除、人々の孤立と断絶、貧困といった今に引き継がれている「内なる植民地主義」にどう向き合うのか、といったこともまた重要なことではないか、とも思う。(農業ジャーナリスト 大野和興)

JVCは、現在10の国 / 地域で活動しています。

カンボジア

■生態系に配慮した農業による生計改善 (CLEAN)

小規模農家の生計向上をめざし07年4月からシェムリアップ県35村で活動。幼苗一本植え (SRI) の田植え後の管理に関する追加研修を実施。農家が栄養や食の安全について関心を持ち農業研修に参加して実践するよう、料理コンテストを実施。スタッフがベトナムで研修。



■シェムリアップにてSRIで田植えをした農家。

■持続的農業と農村開発 (SARD)

安全な水や環境保全型農業による食糧確保をめざして94年からカンダール県50村で活動。環境教育は学校が夏休みのため、教員を対象に目標の設定や計画の作成について研修を実施。

■資料・情報センター (TRC)

持続的農業、農村開発、環境に関する資料を94年から提供。地方の資料センター9カ所は、4～7月、約1400人が利用、約1300冊の本と約150枚のビデオCDを貸し出した。運営能力強化の研修を実施中。

■技術学校

85年に政府と合意しプノンペンで職業訓練校と付設整備工場を始めた。今年の就職内定率は約8割。市内の修理工場調査実施。移転先建設工事継続。

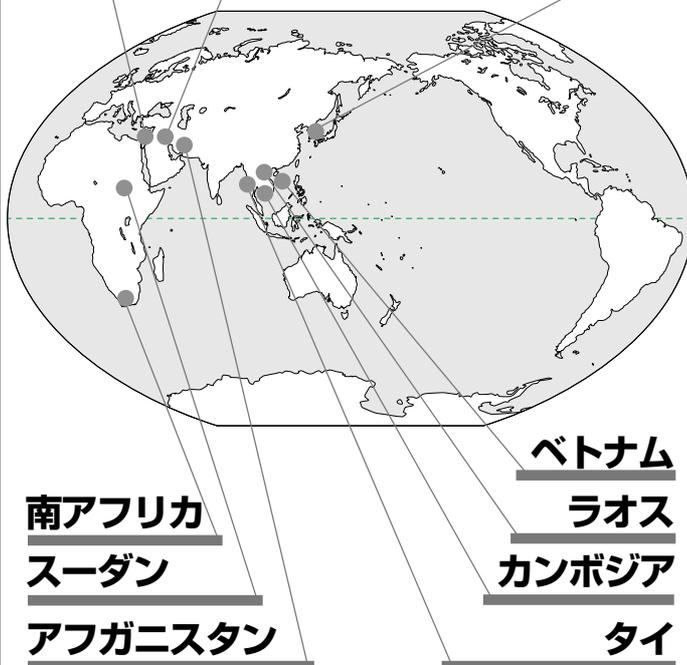
■アドボカシー／調査提言／ネットワーク活動

大使館/NGO/JICA/JBIC 定期協議会の分科会と農業農村開発分科会の調整。カンボジア市民フォーラムの08年総選挙監視の事前準備に協力。(以上米倉)

イラク

パレスチナ

コリア



南アフリカ

スーダン

アフガニスタン

ベトナム

ラオス

カンボジア

タイ

タイ

■農村派遣研修

これまで関わってきた東北タイのプロジェクトのその後の動向を追うため、タイの農民やNGO関係者との交流を続けている。8月4日から11



■スタディーツアーで「地場の市場」を訪問。

日まで東北タイを訪問するスタディーツアーを実施、プロジェクトのその後の様子を確認した(詳細は本誌8ページを参照)。

また、国際協力や環境保護に関心のある人を対象に、タイの農村に滞在しながら「農村の暮らし」や「開発の意味」について学ぶ研修プログラムの再開に向け準備を進めている。(下田)

ラオス

■森林保全

生活の源である森林を守るため、村の権利の確保を「土地森林委譲」制度を通じて行なっており、7月にヒンブン郡1村で実施。産業植林の影響などで土地が減少し、新たな畑地を必要とする隣村との境界線問題を、森林内を共に歩いて調査し、協議を行なった。また、持続的な森林資源利用のために6月に3村へ支援した林産物ラタン(藤)の種は平均60%程発芽し、苗の植替えを行なった。現在、森林ボランティア研修を準備中。



■女性の関心も高いマンゴーやレモンの果樹研修を実施。

十分な食料確保のために果樹研修を4村で実施。レモンやマンゴーなどで、接木、芽接ぎ、取り木、根補強などの手法を紹介。根が茶色く変色した2ヵ月後に植替えを行なう予定。稲作技術改善のために11村で実施している幼苗一本植え (SRI) 農法では、経験交流を実施。青々と稲が育っている各実践者の田を訪問し、株の分桔状況等を見て経験を語り合い、村人同士が学び合う機会となった。また田植え時に行なった、各村のコム銀行の貸出状況把握を行なっている。(以上尾崎)

■複合農業・生活改善

十分な食料確保のために果樹研修を4村で実施。レモンやマンゴーなどで、接木、芽接ぎ、取り木、根補強などの手法を紹介。根が茶色く変色した2ヵ月後に植替えを行なう予定。稲作技術改善のために11村で実施している幼苗一本植え (SRI) 農法では、経験交流を実施。青々と稲が育っている各実践者の田を訪問し、株の分桔状況等を見て経験を語り合い、村人同士が学び合う機会となった。また田植え時に行なった、各村のコム銀行の貸出状況把握を行なっている。(以上尾崎)

イラク

■ガン・白血病医療支援

不足している医薬品を、JIM-NET(日本イラク医療支援ネットワーク)との連携で提供している。依然医薬品の

ニーズは高く、バグダッド、バスラ、モスルの4つの病院の医師からの要請に基づいて購入した抗ガン剤、抗生物質をヨルダンから陸路で搬送した。

■国内避難民支援

220万人を超える人々が国内避難民となっている。バグダッドとアンバール県ファルージャにおける、特に困難な状況の避難家族に豆や米などの食料を配布する。パートナー団体との契約を完了し、物資の購入、配布先の選定を済ませ、現在配布のプロセスにある。北部からバグダッドにかけてコレラが発生し、国内避難民の生活状況はさらに悪化。中央政府からの支援が届かない地域も増えているため、国連やNGOの必要性が高まっている。

■アドボカシー、ネットワーク

来日したJIM-NETのイラク人スタッフと医師・鎌田貴氏かきた たかによるトークイベントをJIM-NETの主催で実施。報道で伝わりにくいイラクの人々の現状を伝える機会となった。(以上谷山)



■国内避難民への食料支援を準備。

ベトナム

■農村開発(ホアビン省)

ホアビン省ナムソン村、バクソン村、デイックザオ村で実施している生活改善のための活動は第2フェーズに入った。行政村を構成する各集落

の状況に合わせて活動を立案、実施していくために参加型農村調査法(PRA)を実施した。また、土壌流出の防止や野菜・飼料不足などを改善し、対象地域の村人が年間を通じて食料を安定的に確保するために、インドからチャタジー氏しやたうじを招聘し、持続的農業と自然資源管理に関する研修をナムソン村とバクソン村で実施した。(伊能)

■ネットワーク

JVCがコーディネーターを務める「持続的農業・自然資源管理(SANRM)ワーキング・グループ」では、06年度にベトナムの農業に関する補助金が北部山岳地域の貧困層に及ぼした影響について、調査を実施した。その結果をオランダのNGO、SNVのスタッフが発表し、参加者と議論を行なった。参加者の主な関心は、WTO加盟後、山岳地域の人々がどのように市場へのアクセスを確保していくのか、そのためにNGOはどのような役割を担えるのか、であった。(伊能)



■土壌流出を防ぐため、斜度を測って木や植物を植える。

コリア

■『南北コリアと日本のともだち展』(子ども交流)

『ともだち展』実行委と朝鮮学校の子も6名が絵画交流のため平壤を訪問した。今年是对日感情の悪化を理由に、毎年平壤市内の小学校で行なってきた絵画展が開催できなかった。子ども交流は通常通りに行なわれ、平壤市の2つの小学校で歓迎を受けた。日本から訪問した子どもたちは、東京での絵画展の様子を、写真などを交えて平壤の小学生に紹介したほか、粘土での共同制作などに取り組んだ(詳細は本誌6,7ページを参照)。

■KOREA 子どもキャンペーン(水害緊急支援)

北朝鮮中・南部地域で豪雨が降り続き、大きな被害が出た。子ども交流で訪朝したJVC代表の谷山とKOREA子どもキャンペーン事務局長の筒井が、国際赤十字連盟や国連世界食糧計画などで聞き取り調査を行なった。今後、水害の影響による衛生状況の悪化が想定されるため、KOREA子どもキャンペーンとして、医薬品などの支援に取り組むことを決定した(支援の詳細は本誌7ページを参照)。(以上寺西)



■平壤の小学校で粘土の工作を楽しむ子どもたち。

南アフリカ

■環境保全型農業(東ケープ州)

安定した食料生産と農村地域の復興を目指し、環境保全型農業の研修と普及を実施。環境保全型農業を實踐し、村

での普及に取り組む篤農家のミーティングを実施。篤農家が「トレーナー」としての資質を向上させることを話し合った。また、南ア政府による「食糧増産政策」の現地調査を実施した。農業や化学肥料代が払えない、食料不足(メイズ以外の豆やかぼちゃを栽培できない)などの問題が出ている。(津山)

■HIV/エイズ(リンボボ州)

感染予防、在宅介護、HIV陽性者およびエイズで親を亡くした遺児への支援を実施。在宅介護の患者宅では、収入がないために食料を買えない家庭が多く、空腹で薬を飲むのは副作用の危険性も高い。緊急措置としての食料支援の他、家庭菜園により自給作物を増やすよう働きかけている。家庭菜園研修では、苗床作りや水不足でもできる畑作りを学んでいる。また、HIV陽性者が病気や治療について学ぶ「治療リテラシー」研修について、クリニックなどと協力し準備を進めている。(水寄、津山)



■東ケープ州カラ地区での篤農家ミーティングの参加者。

パレスチナ

■ガザ緊急支援

緊急事態に直面しているガザで、食糧難により増加する栄養失調児に治療用栄養食を提供。毎月100人以上の新規栄養失調児が栄養センターを訪れ治療中。

■幼稚園児栄養改善支援

ガザの幼稚園で栄養強化ビスケットなどを約500人の園児に提供。夏休み期間は幼稚園でのサマーキャンプの活動も支援。9月からの新学年度開始と同時にビスケット配布も開始した。

■巡回診療支援

エルサレムの医療NGOによる巡回診療・健康教育を支援。夏季サマーキャンプへの巡回診療や学生への応急処置講義が中心。9月からラマダンが明けるとは学校での健康教育が中心。

■子どもの文化・教育支援

ベツレヘムの難民キャンプのハンダラ文化センター支援。支援5年目のサマーキャンプはベツレヘムのYMCAのキャンプ場を借り切ってテント生活。図画工作、ダンス、劇などの行事も無事終了。(以上小林)

■収入創出支援

上記センターの女性グループの刺繍プロジェクトを支援。日本とエルサレムからの特別注文にも対応。また、同難民キャンプの男性による、地元産のオリーブ細工を使った腕輪念珠づくりを支援。(福田)

■アドボカシー

ガザの緊急事態に関する声明・情報発信。11月に日本で開催の宗教者間対話の準備調整中。(小林)



■7月から栄養センターに通い始めたニヴィーンちゃん。

アフガニスタン

■女性と子どもの健康改善のための地域保健事業 (ナンガルハール県)

今年6月から開始された出張診療はJVCの診療所の診療圏内でアクセスの悪い4ヵ村で、毎月8回のペースで継続されている。来診患者数は毎回60～130人に上り、診療所の一日の患者数に劣らない。住民からの感謝の声とともに回数を増やすよう要請されている。本活動には女医や助産師を同行し母子保健を重視するほか、村での保健教育、村の保健ボランティアの実務訓練も兼ねている。今後、村の長老たちの同席も求め地域保健運動への発展を目指す。

JVCの活動地は比較的安全な地域であるとはいえ、安全管理をさらに徹底させ、日常の活動報告や事業実施の方法を日本人職員の行動制限に対応するよう改革している。

■教育支援 (ナンガルハール県シェワ郡)

教員訓練実施に向けて毎月の県教育局とNGOの会合に出席、情報収集している。

■アドボカシー

当国では軍隊や警察がNGOの診療所を占拠して、村民に医薬品をばらまく1日だけの保健活動が続いている。この活動は軍とNGOが協働しているような誤解を与えNGOが反政府勢力のターゲットとなる危険がある。JVCはこの活動を中止させるべく、働きかけている。(以上藤井)



■出張診療で、顔におできができた子どもを治療。

調査研究・政策提言

■第4回国連改革パブリックフォーラムを開催

8月1日、三田の共用会議所において、第4回国連改革パブリックフォーラムを開催した。2年前から実施しているもので、開発、平和構築、軍縮、人権の4つのテーマの相互関連性を意識しつつ、より良い国連政策に向けた議論を行なうものである。

今回は、全体テーマを「地球環境」とし、午前中にNGO、企業、外務省による全体討論(高橋がファシリテーター)、午後に「地球環境」に関連する議題を分科会で議論した。高橋は、平和構築分科会でファシリテーターを務め、「資源と紛争における日本の役割」などについて議論した。参加者は約170名あり、活発な意見交換が行なわれた。この記録は要約が外務省並びにNGO(JVCを予定)のホームページで公開される予定。(高橋)

スーダン

■難民帰還支援 (南部)

整備工場の存在が認知されるにつれ、ジュバだけでなく南部スーダン各地から難民帰還・再定住を支援する国際NGOの車両が持ち込まれるようになってきた。今年の雨季(4～10月)は例年になく雨量が多く道路状況は悪化の一途を辿っており、その中で活動する国際NGOの車両も泥水などによる損傷が激しい。工場のメカニックにとって悪戦苦闘の日々が続いている。

研修生への教育は一時停滞していたが、日本に一時帰国していた車両専門家・井谷が8月末に復歸したのに伴い、日本人専門家2名の体制となって研修生教育も再度本格化した。また、雨漏りが激しかった車両整備用建物の改修工事を8月に実施、雨の日でも濡れずに整備ができる体制が整った。(今井)



■元難民の研修生にテストの使い方を指導する井谷。

Prize

南アフリカ現地代表の津山直子が 第4回ステファニ・レナト賞を 受賞しました！

この度、JVC 南アフリカ現地代表の津山直子が、第4回ステファニ・レナト賞を受賞いたしました。「南アフリカにおける長年の活動実績、そして南アフリカの状況を日本社会に伝えてきた」ことが評価されたとのことです。



津山の受賞のコメント（要約）：
“名古屋出身の私にとって、この賞をいただくことの喜びはとても大きいです。南アフリカでの活動では、「夢を共有し、その夢の輪を広げていく」ことの素晴らしさを感じてきました。そして、「今日喜んでもらう」ことではなく、5年後10年後にどうなるかを考えてきました。今回の受賞を励みに、これからも夢の輪を広げていくことができればと思います。”

ステファニ・レナト賞とは

日本国内において、社会的弱者の立場から人間の尊厳を守る活動を長年続けてこられ、名古屋NGOセンターの初代理事長でもあったステファニ・レナト氏（イタリア出身、1937～2003）。この賞は、氏の精神を伝えるにふさわしい活動を地道に実践している個人や団体を表彰することを通じて、その活動を側面から応援するために04年に制定されました。詳細は、名古屋NGOセンターのHPをご参照ください。

国内ひろば

JVC network



チケット絶賛販売中！

チケット1枚の国際協力 —— JVC 国際協力コンサート 2007

第14回 大阪公演 ヘンデル『メサイア』

2007年12月1日（土）16時開演
いずみホール

第19回 東京公演 バッハ『クリスマス・オラトリオ』、 J.ラター クリスマス・キャロル 他

2007年12月9日（日）15時開演
昭和女子大学人見記念講堂



■第18回東京公演

■第19回東京公演 プログラム

- ・バッハ：『クリスマス・オラトリオ』Ⅰ部
- ・ラター：“Christmas Lullaby”
- ・ハンプトン：“I Wonder as I Wander”
- ・ラター：“Jesus Child”
- (休憩) ---
- ・ラター：“Candlelight Carol”
- ・バッハ：『クリスマス・オラトリオ』Ⅱ部
- ・ラター：“Star Carol”
- ・バッハ：『クリスマス・オラトリオ』Ⅲ部
- ・カーター：“Mary Had a Baby”

これまでの18年間、東京・大阪ともに演奏曲はヘンデル『メサイア』かバッハ『クリスマス・オラトリオ』でした。今年、19年目を迎える東京公演にて、おもしろいプログラムを準備しています。『クリスマス・オラトリオ』前半部（Ⅰ～Ⅲ部）と、英国の作曲家ジョン・ラターのクリスマス・キャロル4曲、そして黒人霊歌を演奏します（曲順は左下表参照）。JVC合唱団の指導者であり、今年のアルト独唱者であり、この東京のプログラムの考案者でもある青木洋也氏に、今年プログラムの特徴を聞いてみました。

“バッハの『クリスマス・オラトリオ』の間にキャロルをはさむのは、世界的に珍しく、お客さんが聴いて、耳的にも音楽的にも意味的にもつながりのいいプログラムを作りました。ラターのキャロルをオーケストラ付きで演奏するのも、貴重なこと。聴いてくださる方だけでなく、歌うJVC合唱団にも楽しんでもらえるプログラムになっています。”

重厚なクラシックが好きな方にも、楽しいクリスマスソングを聴きたい方にも、きっとご満足いただけると思います。

●「一日裏方」ボランティア募集中！ ぜひご参加ください！

- ▶東京公演：バックステージで動くボランティアを募集します。ドア係、チケットもぎり、プログラム渡し、駐車係など、コンサートの舞台裏を支えてください。
- ▶大阪公演：JVCの手工芸品販売などのお手伝いボランティアを募集しています。

チケットお申し込み、問い合わせ：JVC コンサート事務局 石川まで

TEL：03-3836-4108、E-mail：tomoko@ngo-jvc.net、FAX：03-3835-0519

募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVCへの募金は税の優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

7月計 2,458,196 円

8月計 1,031,654 円

	7月	8月
無指定	512,564円	202,758円
タイ	5,000円	0円
カンボジア	343,165円	12,000円
ラオス	182,255円	116,000円
ベトナム	49,000円	6,000円
南アフリカ	13,000円	5,000円
パレスチナ	733,750円	473,896円
アフガニスタン	248,262円	194,500円
コリア	5,000円	500円
イラク	107,200円	8,000円
スーダン	259,000円	13,000円

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497

加入者名：犬養道子「みどり一本」

7月計 229,000 円 / 24 件

8月計 192,046 円 / 22 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座からの自動引き落としを利用する手軽な募金方法です。

7月計 1,417,200 円 / 1,240 件

8月計 1,536,700 円 / 1,326 件

編集後記

数年ぶりに携帯電話の機種変更を行なった。液晶がやたらきれいいでカメラも高画質。同時に基本料金も安くなった。仕事柄デジタル系小物に抵抗はないほうだが、それでも用途の大半はメールと通話で、ネットも検索程度しか使わない。電車の中で大半の人がこの小さい液晶を食い入るように見つめている風景は、やっぱり異様だ。逆に文庫本を読んでいる人を見かけると、なぜかホッとする…いかん、トシカ!?(H)

新インターン紹介

稲葉 久美子
いなば くみこ

ホームページインターン



今年の六月から「会報誌発掘ボランティア」として、すでにJVCに関わっていました。以前から関心を持っていたNGOに直接関わってみたい、国際協力に携わりたいという思いからです。ボランティアをしなから、インターン追加募集の話聞き、学生である今しかできないであろうと応募しました。

ただ、私にはホームページ作成に関する知識がほとんどなく、ホームページ担当の細野さん一から教わるころから始めなければなりません。それでも少しずつ作業を覚え、現在はどうしたら見やすくなるだろう、と自分なりに手を加えることもできるようになってきました。すでに残り半年を切りましたが、精一杯頑張ろうと思います。

森若菜
もりわか菜

イラク事業インターン



イラクとの出会い、私にとってそれは留学先であるシリアのダマスカスでのイラク難民との出会いでした。援助が不十分で、生活の不安を抱えながら異郷で暮らす彼らの話を聞くうちに、中東という地域で起きている事の重大さを感じました。圧倒的な状況を目の前に、自分は小さな存在だと感じてしまいます。でも、そういう時にこそ発想の転換が大事なかもしれません。

一人の間でもできることはあると思います。が、もっと良いのは大勢の人と問題を共有し、問題解決の方法を共に考えていくことだと思います。このたび、JVCのインターンとして国際協力の分野からイラクの問題に関わる機会を得て、これから自分に何ができるかを探っていきたいと思えます。

2007年度夏募金にご協力くださいました。ありがとうございました。



2007年夏募金集計(郵便振替分; 9月末時点)

1,433 件 **10,192,603 円**

[募金額の一部(20%以内)は管理費とさせていただきます。また、上記夏募金の金額は、ページ左上のJVC募金の欄には含まれておりません。]

会員専用ページパスワード(11~12月) →→→ **J9yC2bzMn8**

※ JVC ホームページの会員専用ページでは、T&Eのバックナンバーを順次公開中です。現在、この作業を手伝って下さる方を募集中。細野までご連絡を!

JVC CALENDAR
2008
子ども日記@地球
Photographs by Yoshio Komatsu
小松 義夫

壁掛型
1500円
おなじみ



JVC カレンダー 2008

『子ども日記@地球』

皆さまにご愛用いただいているJVCカレンダー。2008年は『子ども日記@地球』。世界の子どもたちの笑顔・日常をテーマにした14枚の写真をお届けします。お手伝いする女の子、学校帰りの子ども集団、ブランコに夢中な男の子…、見ているだけで元気になるカレンダーです。写真提供は、JVCカレンダーでは初登場の小松義夫氏です。また、今年は卓上型を作りました。従来の壁掛型と合わせてご利用ください。



卓上型
1200円
限定販売



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■JVCでは会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年6回この会報誌と年次報告書をお届けします。

- 一般会員 10,000円
 - 学生会員 5,000円
 - 団体会員 30,000円
- ※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。

→ s-tera@ngo-jvc.net

会員数 (10月4日現在) 合計 1,358人
(正会員 651人 賛助会員 707人)

■オリエンテーション(説明会)へお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。(無料。予約不要です)

- 第1月曜日 午後7:00 - 8:30
 - 第2・第4土曜日 午後2:00 - 3:30
- ※会場はJVC東京事務所です。

■E-mail

info@ngo-jvc.net

■ホームページ

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は再生紙を使用しています。